関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

Carnets de la drole de guerre

著者	川神 傅弘
雑誌名	仏語仏文学
巻	26
ページ	35-52
発行年	1999-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017369

Carnets de la drôle de guerre

川　神　傅　弘

Carnets de la drôle de guerre はサルトルの今次大戦中の『日記』である。[drôle de guerre]：1939年9月1日，ドイツ軍はポーランドに侵入，これに対してフランス，イギリスが宣戦布告をし第二次大戦の勃発となる。しかし，1940年5月10日，ドイツ軍がベルギー，オランダなどの中立国に侵入するまでは両軍の間に戦闘らしい戦闘は交えられることもなく，フランス軍はマジノ線，ドイツ軍はジークフリート線を境にしてにらみ合いの状態が続いた。この戦闘なき戦争の状態，この期間が，paix-guerre, la guerre-paix[1] もしくは drôle de guerre と呼ばれるものである。

パリ陥落が6月14日，ドイツとの休戦条約の調印が6月22日である。ドイツ軍が本格的な西部戦線侵攻を開始したのは5月であり，それまで7カ月余り，フランスは躊躇，逡巡し，まったく積極的な行動に出ていない。当時，ヒットラーはポーランドにかなりの兵力を投入していたので，直接フランス軍と対峙する戦線ではフランス軍がドイツ軍の約6倍の兵力を維持していたにもかかわらず…

このフランス軍逡巡の原因について，あの *Le Silence de la Mer*『海の沈黙』で有名な作家 Jean Bruller ペンネーム＝Vercors は，その後レジスタンスの記録である *La bataille du silence*『沈黙のたたかい』において，次のように回想している。当時，世界最強を自負していたフランス陸軍の逡巡は，ひとつには，ドイツの再新鋭の空軍と機甲化師団（パンツァー）を目の前にして，フランス側の戦闘装備の立ち遅れを感じていたこと，あとひとつには，政府と軍首脳部が，ドイツに対する恐怖以上に，国内左翼勢力を恐れていたことを挙げている。Vercors はこの緒戦においてフランス軍の積極的な行動が万一あったら，第二次大戦の様相は相当変

わったものになっただろうと語っている。これがいわゆる「平和な戦争」「奇妙な戦争」と称されるものである。ところで，『日記』はその9ケ月余りの軍隊生活の動員の期間のうちの7ケ月間のサルトルの思考の記録である。この間彼は日に13時間ペンをふるうことができたと言っているが，日に3通の長い手紙を書き（ボーヴォワール，母，タニア，その他），長編小説『自由への道』を執筆し，またこの膨大な量の『日記』を書きつづったわけで，まさにこの超人的なエネルギーには圧倒される思いである。

サルトルは宣戦布告の翌日39年9月2日に動員をかけられ，同月11日には Marmoutier というアルザス地方の寒村で後方任務につくのである。

実はこの *Carnets* は既に一度1983年に同じ出版社から初版がでており，ノートは15冊あったようであるが，サルトルが友人に託した際，多くが失われ15のうち第Ⅲ，第Ⅴ，第XI，第XⅢ，第XⅣ の五冊のみが初版に採録された。この『日記』の編集にはサルトルの養女，Arlette Elkaïm Sartre があたった。なほ，『日記』の執筆にあたり，サルトルはスタンダール，ダビ，ルナール，ゴンクール，ジッドを参考にした事実を認めており，後世に残ることを見越して書いた，と思われる。彼女 Arlette Elkaïm は新版への発行にあたり，その présentation で，1991年6月に第1冊目が見つかり，B. N. のお陰でこの度従来のコレクションにこれを付け加えることができたと記している。

Carnets の内容は大きく4つの側面をもっている。読書ノート，気象観測班の一員として体験した戦時下のメモ，『存在と無』『倫理学』・La Morale，『方法の問題』『家の馬鹿息子』に通じる哲学的省察，そして自己自身の再検討の書でもある。しかし，日常的な些細な出来事を記すにあたっても結局は哲学的省察に展開していくわけであり，『日記』の 3/4 はサルトル哲学形成のプロセスといってもよいであろう。

『日記』を通読しつつ，幾つか注目すべき問題，語句に遭遇した。就中私の心をとらえたものは“本来性（authenticité）[2)]”という語句である。

Curieuse liaison de stoïcisme et d'optimisme. On la trouve déjà

chez stoïcien antique qui a besoin de croire que le monde est bon. Plus qu'une liaison théorique, c'est une machinerie psycholgique. Encore une ruse pour se tranquilliser, encore un piège de l'inauthenticité.[3)]
「ストイシスムとオプティミスムの奇妙な連関は，世界は良いものとする古代ストア派において既に見出されている。それは理論的連関というより心理的な機会仕掛けであり，精神を安定させるための術策であり，非本来性のわなである。」*Carnets* 第1冊の書き出しで既にこうした文言が現れ，その先も authentique（本来的），l'authentique（本来的なもの），authenticité（本来性）またはその逆で inauthentique（非本来的），l'inauthentique（非本来的なもの），inauthenticité（非本来性）といった語彙が『日記』の全編にわたって間断なく散見される。従ってこの「本来性」authenticité という概念に，この時期のサルトルのこだわりがあると見るのは当然のことであろう。authenticité の意味内容を検証することで，何かが浮かび上がってくるのではないか。ひとつのエピソードからはじめてみたい。

サルトルは砲兵隊参謀部付きの気象観測班の任務についている。仕事の内容は『自由への道』第2部で主人公マチウが担当している気球の打ち上げである。サルトルは仲間の兵士としょっちゅう言い争いをしているが，或るとき「ブルジョワと一緒に居ることは堪え難い」と放言し，仲間の兵士ピエテールに「ブルジョワと居たくなければ何故ここにいるのか」と言い返され，次のような弁解をする。

《Parce que j'ai commis en 1929 la faute de me faire embusquer à la météorologie. C'était une saloperie, je le reconnais.》
Pieter:《Ha! Ha! tu es donc un salaud!》[4)]

サルトルはあやまって気象班という楽な部署につかせてもらったことを認め，それを恥じており，更に Pieter から salaud 呼ばわりされる。Pieter は更に，

Moi je suis plus franc que toi, je me suis fait pistonner, je suis satisfait du resultat et je le dit.[5)]

彼はコネを使って［気象班］にいるというこの結果に満足しており，そのことをはっきり口にする。

サルトルは動揺し，そしてこう考える。

仮に私が改めて特権的な部署たる気象班を捨てて歩兵隊に志願すれば私の思考は堅固で，法的な意味で有効ということになるだろう……と。しかし Pieter は「それを気質によって説明する，これこれの仕方で振舞うものはそのように振舞うことが彼にとって自然だからだ。英雄と呼ばれる男とは気質によってそうなっただけだ」と，語るだろう。つまり，個人的気質を認めようとしない。存在するのはタイプだけ，タイプは受け継がれた本性と職業活動との交差によって形成される。

Il ne dira jamais: Paul a peur——mais: Paul c'est le type qui a peur.[6] Pieter によるとサルトルは《ボヘミアン的性格》と知的職業から証明される。このように気質もまた遺伝，職業，環境に由来し，すべてが普遍的相対主義のなかにのみこまれる（Tout est noyé dans un relativisme universel)。こうした一連の思考からサルトルは Pieter のような人間は，

Lui-même se perd exprès dans ce relativisme, il se dissout dans le social. Comme *l'être inauthentique de Heidegger* qui dit: on meurt, pour ne pas dire: je meurs. Il n'a de rappart avec lui-même qu'à travers la société.[7]

《「私が死ぬ」と言わずに「人が死ぬ」と言うハイデッガーの非本来的存在》の文言が示しているのは，いわゆる実存主義の基本的テーマたる個人の《un tel》からの脱却を目指すものである。非本来的存在は個人の価値を失った存在として，社会を通してしか自分自身との関係をもたないものとして措定されていることが分かる。on《ひと》には，個人的価値が失われている。例えば，Pieter は《Il y a cinq cent mille planqués comme moi, et si je n'étais pas là, un autre serait à ma place》.[8]

自分のような《後方勤務》は50万人もいて，それは interchangeable である。相互交換が可能であるといっているわけである。こうした，個人が交換可能性の中に埋没してしまった状態がいわゆるサルトルのいう on,

un tel,《ひと》,《なにがし》, つまり非本来的存在であるというわけである。

サルトルの意味する非本来的（inauthentique）の意味は一つにはそうした角度から射照されるのであって, Individualité perdu dans le《on》, relativisme social et tolérance universelle, rationalisme de politesse, cécité aux valeurs, voilà *le fond de son inauthenticité*.[9)]
《ひと》の中に見失われた個性, 普遍的寛容, 社会的相対主義, 儀礼上の合理主義, 価値への盲目, 以上が非本来性の基盤であるということである。

ところで, サルトルに authenticité（Eigent-lich, Eigent-lichkeit）を吹き込んだのは実はハイデッガーである。彼はフッサールの現象学を学ぶ為にドイツ留学をしているが, その留学の後半期でサルトルはむしろハイデッガーに興味をもつ。ハイデッガーの影響について,

Si je veux comprendre la part de la liberté et du destin dans ce qu'on appelle《subir une influence》, je veux réflechir sur l'influence que Heidegger a exercé sur moi. Cette influence m'a paru quelquefois, ces derniers temps, providentielle, puisqu'elle est venue m'enseigner l'authenticité et l'historicité juste au moment où la guerre allait me rendre ces notions indispensables.[10)] と語り, ハイデッガーによって本来性と歴史性を教わったことを認め, その影響は天祐であったと語り, そして Si j'essaie de me figurer ce que j'eusse fait de ma pensée sans ces outils, je suis pris de peur rétrospective[11)] これら二つの概念なしには自分の思想の発展, 形成はなかっただろうと語っている。彼に直接的に影響を与えたのはハイデッガーの *Sein und Zeit*『存在と時間』の第2編, 第2章「自己本来的存在可能の現存在的証言と覚悟性」及び, 第3章「現存在の自己本来的な全体存在可能と, 慮の存在論的意味としての時間性」であると思われる。

ハイデッガーは現代人の特徴として「水平化」「凡庸化」を挙げ, 中性化, 平均化された「ひと」《on》《Das man》, 日常性の中にひととして頽落した存在を本来的自己にまで取り戻すことを目指した。この本来的自己

こそが「実存」と呼ばれるものであって，「ひと」Das Man を脱却せしめる為にキルケゴールやニーチェが「単独者」や「超人」の思想を持ち出したのに対して，ハイデッガーは「無に直面する自己」こそが「本来的自己」であると主張するのである。今少し具体的かつ大筋だけを紹介すると，現存在の日常性の根本的在り方は頽落であり，その3つの特徴は雑談，好奇心と曖昧さである。「ひと」は雑談によって真の理解をもつことなく，唯話されていることに聞き入るだけであり，世間一般に承認された解釈の枠内で動いているだけで，真の「存在」の理解への道はふさがれている。好奇心は絶えずひとつのものから他のものへと移っていき，絶えず何か新しいものを求めるが，それは理解するため，すなわち，そのものの「存在」に到達するためではない。「とどまらないこと」「分散すること」「停滞しないこと」がその本質的性格である。また「曖昧さ」とは，噂の世界にみられる「曖昧な」知であり，これも真の知とはなんの関係ももたぬ，実は無知にすぎず，こうした状態では「ひと」はそこでは本来的なものと非本来的なものとの区別がつかないわけである。こうした状態は Da-sein 現存在が，本来的な自己存在としての自分自身からすでに脱落して，「世界」へ頽落していることを意味する。そして，様々に紆余曲折はあるが，結論的に言うと，非本来的な「ひと」を本来的自己に連れ戻すのは「良心」Gewissen であり，その良心の本質的性格は「呼び声」(Ruf) であるというのである。「ひと」の「雑談」に対して，この「良心」の話しは「無」についてであり，われわれを非本来的実在から呼び出すその良心の話しは，実は「沈黙」である。かくして，良心は，自己のもつとも本来的な存在可能を理解すべく自己自身に呼びかける現存在の声なのである。

そして，その良心の呼び声は現存在に「負い目」Schuld を理解させる。「負い目」とはわれわれが「死への存在」Sein zum Tode であることを意味し，現存在の「虚無性」Nichtigkeit にかかわるものであるが，結局，良心の呼びかけを理解するということは現存在が負い目あるものであることを意味する。そして，その「良心」の「呼び声」は，自己を「ひと」から連れ戻して，その「負い目あること」に直面せしめるものとして沈黙の

形態をとる。余談ながらこのハイデッガーの「沈黙の呼び声」は，日本の禅仏教に通じるものがあり，かつてパリで或る日本人の禅僧が舞台上で座禅を組んでいる様を目撃したサルトルが称して“これはまさしく実存的だ”と評したことは有名なエピソードである。ハイデッガーは「自己固有の負い目あることに対して，沈黙のうちに，不安に身構えて，自ら投企すること」を「決意性」Entschlossenheit と呼び，これが本来性の証明であるとする。つまり，現存在の本来性は「良心」と「決意性」であるというものである。

以上，ごく手短にハイデッガーにおける Eigentlich［本来的］乃至，Eigentlichkeit の使われ方，その意味を紹介した。

ハイデッガーはもっぱら日本では『阿弥陀経』『正法眼蔵』などの仏典との比較によって解釈されるむきがあるが，それは良心の呼び声や沈黙の声といった観念に類似性があることによる。サルトルの思想にはそのような抹香臭さはない。

こうしたハイデッガーにまつわる経緯をふまえて，ここまでサルトルの言説を整理してみると，ひとつには「私が死ぬ」と言わずに「人が死ぬ」というような，自分について語るのに，他人について語るのと同じ調子で語る，つまり社会を通してしか自分自身との関係を持たない存在が，非本来的存在である。また，そうした存在は「Paul は怖がり屋だ」と言わず，「ポールはこわがるタイプだ」として，所属するカテゴリーに個性を昇華せしめてしまい，個人の相互交換性を何の疑念もなく認めてしまう。つまり，個人的気質というものは全く認められることなく，それは職業や遺伝や環境に環元される普遍的相対主義にのみこまれてしまう存在でもある。

かくして，各自の個別性は社会的相対主義，あらゆるものの許容，儀礼上の合理主義（カミュの『異邦人』のムルソーはこれにさからって死刑になった），価値への盲目等の非本来性をすべて引き受けるといった個別性 individualité を失った《ひと》となるわけである。

更にサルトルの「本来性」の姿を追い求めて見よう。

Choc désagreable. Vis-à-vis de Gauguin, Van Gogh et Rimbaud j'ai un net complexe d'infériorité parce qu'ils ont su perdre, (...) Je pense de plus en plus que, pour atteindre l'authenticité, il faut que quelque chose craque. C'est en somme la leçon que Gide a tirée de Dostoïevsky ... [12)]

サルトルはゴーガン，ゴッホ，ランボーに対する劣等感を覚え，その理由は彼らがおのれを破滅させえたからであり，本来性に到達するためには何かが破綻しなければならないと考える。先の破綻した芸術家達は夫々，あらゆるものを許容することなく（つまり，許容範囲はきわめて限定され），儀礼上にも極めて不合理で（世間体に合わせない），相対主義どころかある意味では絶対主義を貫き，己のみが信奉する価値にまっしぐらに突き進んだ芸術上の闘士ともいえよう。まさに《ひと》から脱却した実存といえる。この件りに続いて，

C'est en somme la leçon que Gide a tirée de Dostoïevsky et c'est ce que je montrerai dans le second livre de mon roman. Mais je me suis préservé contre les craquements. Je suis ligoté à mon désir d'écriture.[13)]

と語っている。

ここにうかがえる「本来性」は先のハイデッガーの唱えた「良心」と「決意性」に同定されるように思われる。この良心と決意性は敢えて本来的自己ともいうべきもので，

L'authenticité exige qu'on accepte de souffrir, par fidélité à soi, par fidélité au monde.[14)]

本来性の自己への忠実さ故に……の文言から察せられるように，社会的相対主義を排し，儀礼上の合理主義や価値への盲信をしりぞけて，個人の「心奥」から呼びかける沈黙の声に耳を傾けた結果として破滅に至る行程に，ひとつのイメージとしての「本来性」をサルトルは見てとっているわけで，彼は，自分は書く欲望に縛られているが故に破滅から身を守られているが，『自由への道』の第2巻で主人公 Matieu を自分の身代わりとし

て破滅に導くことを目論んでいる，ということになるわけである。

サルトルは自らの作中人物を本来的な姿に仕立て上げることは出来ても，自らが本来的になることは差し控えている。私はものを書きたいという欲望に縛られているからだといっているが，それはなぜか？

Il est dur de quitter la vie. Celui qui soudain se guinde et pense la quitter sans regret, celui-là s'est dupé, de façon ou d'autre.[15)]

「この世から去るのは辛いことである。突如としてもったいないと思ったり，未練なくこの世をおさらば出来ると考える者は，なんらか自分を欺いている」と，サルトルはいう。彼はそうした境涯に投げ込まれたら，il faut plutôt souffrir et geindre et pleurer (...) L'authenticité exige que nous soyons un peu pleurards. L'authenticité et la vraie fidélité à soi.[16)] むしろ苦しみ，呻き，涙を流すべきである。本来性と，自己への真の忠実さは我々に少々泣き虫になることを要求するともいっている。更に，例えば拷問で「人が吐かせようとしたことを吐かずに死んでゆく英雄」が自分だとしたら，

Pour moi, à vrai dire, je sais qu'en pareil cas les cris me seraient arrachés malgré moi. J'essayerais de toutes mes forces de ne pas pleurer. Je pleurerais sans doute — je ne sais — mais vaincu par la peur et humilié, la peur romprait mon stoïcisme comme une digue, mais j'essayerais sans doute d'être stoïque. C'est par orgueil et je me blâme. Orgueil — respect humain.[17)]

力の限り泣くまいと試みるであろうが，自分は，われにもなく叫び声を発してしまうかもしれない。しかし，それは恐怖に打ち負かされ，恥じいってのことであり，恐怖は防波堤を決壊させるように私の禁欲主義を打ち崩すだろう。それでも自分は禁欲的であろうと試みるだろうが，それは自尊心からであり，私は自らを非難する。つまり，自尊心＝世間体であるからと語る。ここから，禁欲主義の一側面として，その自尊心，世間体は本来性を妨げるものとして機能するものとサルトルが見做していることが分かる。

かくして，前の「本来性」は自己への忠実さ，世界への忠実さ故に苦しむことを受入れ，自尊心や世間体に由来する stoïsisme を捨てて泣きわめけと要求するのである。なぜなら ... la peur est l'émotion la plus intense ... la plus authentique.[18] 恐怖とはもっとも力強い感情であり，より本来的な感情であるからだというのである。

それでは，サルトルの本来性は，自己の感情に忠実に，感情のおもむくままに全く対社会，対世間的おもんばかりをすべて捨て去って行動する，言い換えれば［世界内・存在］としての，ハイデッガーの言う In-der-Welt-sein（世界内存在），Mitsein（共同存在）としての現存在を捨象して，狭く限定された自己に純粋になれと言っているのであろうか。どうも，そうではないようである。サルトルは

Cette authenticité dont je cherche à me rapprocher, je vois clairement en quoi elle diffère de la pureté gidienne. La pureté est une qualité toute subjective des sentiments et du vouloir. Ils sont purs en ce qu'ils se brûlent eux-mêmes comme une flamme, aucun calcul ne les souille. Purs et gratuits. (...) Mais l'authenticité n'est pas exactement cette ferveur subjective. Elle se peut comprendre qu'à partir de la condition d'un être jeté en situation ... Être authentique, c'est réaliser pleinement son être-en-situation, quelle que soit par ailleurs cette situation.[19]

「自分が近付こうとしている本来性はジッド的純粋とは異なっている。純粋さとは感情や意思のまったく主観的な性質である。それらが純粋であるのはそれ自体で炎のように燃えているという点においてであって，いかなる打算もそれらを汚すことのないような性質のもので，純粋で無償なのだ。しかし，「本来性」はこうした主観的な熱意と全く同じものではない。「本来性」は人間の条件・状況へと投げ込まれている存在の条件から出発することでしか，理解され得ない。本来的であるとは，その状況がいかなるものにもせよ，自己の《状況—内—存在》を現実化することである」と，

語るのである。

従って，ランボーや，ゴッホのように純粋に一途に燃えて，燃え尽きることは出来ないということになるのである。つまり，一方では状況を，また一方では人間現実を十全な存在へ導くという意識があって，一方的に対社会的地平を切り捨てることなどサルトルは考えていないのである。こうしたジレンマの中から，恐らく彼の morale 論は構想されようとしたと思われる。本来性の観念に潜む矛盾（2項対立），それはいわば熱情と理性の葛藤にも似た2項を抱えた構図といえよう。

よってサルトルの考える「本来性」は単なる自己への忠実，対社会的配慮を無視した純粋性ではない。実存いわば人間各個人が，孤立して存在するのではなく，世界（世間）において存在するというアプリオリな条件において，言い換えれば，個人は自己以外の他の人間との交渉を持つ存在であるという前提的基盤の上に乗っかったものといえるであろう。

今少し，具体的な記述にあたってみよう。

J'ai voulu copier un passage du journal de Gide sur le《peu de réalité》et j'ai eu tort de ne pas le faire. Il explique à Roger Martin du Gard qu'il y a un certain sens du réel qui lui manque et que les événements les plus importants lui semble des mascarades.

Je suis tel, et de là vient sans doute ma frivolité. J'ai longtemps douté ... si la realité n'était un idéal impossible à sentir et placé à l'infini (...) mais je constate que Gide, comme grand bourgeois, et moi comme fonctionnaire, d'une famille de fonctionnaires, nous n'étions que trop disposés à prendre réel pour un décor.[20)]

「私は現実性の不足についての Gide の日記を写そうと思った。彼は M. du Gard に“自分にはある種の現実感覚が欠けており，まことに重大な出来事も仮装にみえてしまう”と書いているが，自分もそうであり，私の軽薄さは恐らくそこに由来する。私は現実性とは無限のなかに位置し，感じることが不可能な理想なのではないかどうか疑っていた。しかし，ジッドは大ブルジョワとして，私のほうは公務員の家の出身の公務員として，

現実を舞台装置と受け取る素地が十分にあったと確認する。」この文言について，ジッドは『日記』で，

《C'est le sentiment de la réalité que je n'ai pas. Il me semble que nous nous agitons tous dans une parade fantastique.》[21)] 「私が持っていないのは《現実に対する感覚なのである。われわれはみんな幻想的な芝居のなかでうごめいているような気がする」と語っている。続けてサルトルはこう語る。

Finalement, à Gide pas plus que moi, il n'est jamais rien arrivé d'irréparable. Je n'ai pressenti l'irréparable qu'à une ou deux reprises par exemple lors que j'ai cru devenir fou. A ce moment-là j'ai decouvert que tout pouvait m'arriver *à moi*. C'est un sentiment précieux et tout à fait nécessaire à l'authenticité, que je m'efforce de conserver autant que je peux. Mais il est fort instable et, sauf dans les grandes catastrophes, il faut une certaine contention pour le maintenir en soi.[22)]

「結局，ジッドにとっても私にとっても，一度だって取り返しのつかないことが起こったことはない。私が取り返しのつかない何かを予感したのは，一度か二度だけ。例えば，私が狂人になると思ったときである。その時，私にはどんなことでも起こりうるのだということを発見した。それは貴重で，かつ本来性には是非とも必要な感情であり，私はそれをできるだけ保存しようと務めた。しかし，その感情は実に不安定なものであって，大きな災厄の時を除いて，それを自分の内に保持しつづけるにはある種の緊張が必要だった」と語っている。

これは前に述べたように，その感情とは「本来性に達するためには何かが破綻しなければならぬ」という考え方と同定しうる文言である。

そしてサルトルはこの sens du réel qui lui manque 現実性の不足の感覚は「本来的自己の回復」に必要なものではないかと考えるのである。

Je voulais indiquer que, n'ayant pas été dans le bain tout de suite, ne m'étant pas senti *responsable*, n'ayant pas souci d'argent, je n'ai

jamais pris le monde au sérieux.[23]

私は直ちに現実とかかわり合わず，私には責任が無いと感じ，金銭的な心配などしたことがなかったので，世界を真面目に考えたことがない。更に，

Il y a sérieux, en somme, quand on part du monde et quand on attribue plus de réalité au monde qu'à soi — ou, à tout le moins, quand on se confère une réalité dans la mesure où on appartient au monde. Ce n'est point par hasard que le matérialisme est sérieux; (...) les révolutionnaires sont sérieux.[24]

結局，人が世界から出発し，自己よりも世界により多くの現実性を付与するとき，あるいは少なくとも人が世界に属しているというかぎりにおいて自己に現実性を授けるとき真面目さがある。唯物論がくそ真面目であるのは少しも偶然ではない。革命家はくそ真面目なものだ。

サルトルは更に，資産家達もくそ真面目であり，人間が自己を恐れ，主観を対象化し，自己を世界から発する放射だとみなすとき，人はくそ真面目になる。技師，医師，物理学者，生物学者などはくそ真面目である，と続ける。

かくして，

Voilà pourquoi l'argent, signe de toutes ses choses du monde, conséquence et *de* conséquence est l'objet par excellence du sérieux.[25]

世界のあらゆるものの表徴であり重要な帰結である金銭がくそ真面目のこの上ない対象となる，と語るのである。

Bref, Marx a posé le dogme premier du sérieux lorsqu'il a affirmé la priorité de l'objet sur le sujet.[26] 要するに，マルクスが主観に対する対象の優位を肯定したとき，「くそ真面目さ」の最初の教義を提起したのである。

サルトルの主張はこういうことであろう。自分は「現実性の不足」によって，世界を舞台装置とみなす傾向があり，自分が世界の一部をなしていないと感じ，人生をひとつの遊戯だと考えることが出来たので，くそ真面目

から守られたと感じている。つまり，人間がその最初の原則であって，世界を「本体」として自分を「対象化」するのでなく，自分自身が自らの行為と価値を定め，自分の定義した規則にのっとって行動するのだ，ということであろう。

そういう人間にとっては，toute son acte est jeu[27] 彼の行動はすべて遊戯になるという訳である。

そして，その対極に位置する「くそ真面目な人間」とは，

Voyez cet homme qui hoche la tete, disant: 《C'est grave! C'est très grave!》(...) ceci, que le monde domine l'homme, qu'il y avait des lois et des règles à observer — toute en dehors de nous.[28] 頭をふりながら「それは重大だ。とても重大なことだ」と言っている男であり，我々の外側にある守るべき法則と規則をもち，世界がその人を支配している人物なのである。

... la question qui m'intéresse aujourd'hui est celle-ci: l'authenticité, en condamnant à tout jamais la porte de la tour, va-t-elle ramener en moi l'esprit de sérieux?[29]

サルトルは，本来性が塔の戸口を永久にふさぐことによって「くそ真面目な精神」を私の中に導き入れることになりはせぬかと危惧するのである。

またサルトルは同時代の作家として，Jules Renard を取り上げ，

Ce qui acheva de ligoter Renard, c'est l'idée qu'il était un 《artiste》. (...) Renard, un type complètement ligoté. Ligoté par sa famille, par son époque, par les modes litteraires, par son mariage, par son laconisme ...[30]

ルナールを完全に縛りつくすのは彼が「芸術家」であるからであり，ルナールは完全に縛られた男だった。家族，時代，文学的流行，結婚，簡潔な文体に縛られた男であったとする。サルトルは後年1945年，*Situation* 第1巻において，*L'homme ligoté Notes sur le Journal de Jules Renard* と題するルナール批判論を展開するのであるが，その理論的根拠も果たして，自然主義者ルナールの「現実を実証主義的科学が組み立て，濾過した，

また選り分けたままの外観にすぎぬもの」としてみなす彼の態度にあるようだ。l'univers qu'il voit, c'est l'univers de tout le monde. Et pour ce qu'il ne voit pas, il fait confiance à la science. En un mot, le réel auquel il a affaire est déjà tout construit par le chosisme du sens commun.[31)]

ルナールの見る世界はすべての人の世界であり，見えないものについては，彼は科学を信頼する。一口に言えば，彼の関わりを持つ現実は常識的事物主義によって，すでにすっかり組み立てられている。Ainsi, le vieux rêve d'atteindre au typique n'a pas disparu.[32)] こうした態度は類型的なものに到達したいという昔の夢に執着する生き方で，それは彼が既に出来上がっていた《芸術家》という類型を生きようと試みた，すなわち仕上がっている現実に自己をはめ込む現実主義者であったからだとサルトルは批判するわけである。個別性の喪失ということである。

最後に，サルトルが当時ボーヴォワール以上に熱をあげていた恋人ターニャ（本名ワンダ）のサルトルに宛てた風刺めいた手紙を披露して締めくくりたいと思う。

《Si tu devenais authentique, tu n'en serais ni mieux ni plus mal, ça serait autre chose. D'un point de vue social tu vaudrais moins et ta vie de l'extérieur ferait sans doute moins réussi. Mais en soi tu serais mille fois plus poétique et mille fois plus pur; au lieu d'écrire, tu serais un sujet de livre (ça ne te dit rien?). ... tu as trop pensé, tu te connais trop bien et puis tu écris. En admettant qu'on ait une lueur d'authenticité, tout s'en va quand on écrit ... Au fond tu devrais droguer pour ça. Les seuls écrivains un peu authentiques sont surréalistes et encore: Rimbaud.》[33)]

「仮にあなたが本来的になったとしても，だからといって今よりも良くも悪くもなりはしないでしょう。社会的見地から見れば，あなたは価値が少なくなり，人生は外見的にあまり成功したふうには見えなくなるでしょう。でも，それ自体としては，あなたは千倍も詩的になり，千倍も純粋に

なるでしょう。本を書くかわりに，あなたが本の主題になることでしょう。あなたは余りに考え過ぎ，自分を余りに良く知り，そのうえものを書いている。要するに，本来的になろうとするなら麻薬でも飲むべきでしょう。多少とも本来的といえる数少ない作家は，シュールレアリスト達とランボーです。」

以上ターニャの手紙を読みながら，サルトルは C'est vrai, je ne suis pas authentique. (...) Je n'ai pas eu la Nausée, je ne suis pas authentique, je suis arrêté au seuil des terres promises. (...) Je ne suis qu'orguil et lucidité.[34]「確かに，私は本来的ではない。私は〈嘔吐〉を経験しなかったし，私は本来的ではない。約束の土地の入口で遮られている。私は自尊心と明晰でしかない」とサルトルは思うのである。

自己に忠実で，純粋であらねばならないが，全く他者や世間を捨象し，無視して破滅するようなことであってもならない。世界に対しても忠実であらねばならないが，自己の価値を無視して，社会に過度な現実を付与し，社会に支配されてはならない。何よりも，サルトルは彼自身のもつ stoïque な性格，それに由来する自尊心と世間体，加うるに彼の明晰性が，彼自身を約束の土地へ導くことを遮断しているようである。

このようにサルトルの目指す「本来性」は「純粋性」と「社会的地平：situation」，「現実性の不足」と「現実に余りに多くの価値を付与するくそ真面目の精神」のあやうい均衡の中で煩悶する思考回路の趣を呈している。

つまり，彼の思考は「純粋性」「situation」「現実感賞の不足」「くそ真面目の精神」という 4 つの棟を結ぶ回廊を堂々巡りしている感がある。『存在と無』の結語としてサルトルは la Morale『倫理学』の執筆を約束したが，それは生涯果たされることなく終った。『方法の問題』『弁証法的理性批判』等を子細に調査してみなければ明言はできないが，恐らく彼の『倫理学』の試みの挫折はこの回路の堂々巡りを脱出する活路がみつからなかったことを物語っているのではないかと推察するわけである。

ところで，Stuart Zane Charmé は *Vulgarity and Authenticity*——

dimentions of otherness in the world of J.-P. Sartre に於いて,

Throughout his life, authenticity remained the existential grail of Sartre's quest, the exquisite fruit of embracing and exercising one's own freedom.[35)]

と語り，本来性はサルトルの生涯を通して，中世ケルト神話の騎士・ペルスヴァルが探求した聖杯であり，彼にとって“人間の自由に等しい，またその自由を行使する上で，この上なく素晴らしい果実なのだ”と語っている。

但し，彼も認めているように,

In fact, like the Buddha describing enlightenment, Sartre says more about what authenticity is not than he does about what it is.[36)]

ブッダが「悟り」について語る場合同様，サルトルは本来性とは“…ではない”，言い換えれば“…は非本来的だ”という形でしか本来性を明確に表現していないのである。従って，向後の作業として，“…は本来的である”乃至“本来的とは…だ”とする肯定的定義を彼の著作に探求した上で，サルトルの morale 論究明の足掛かりとしたい。

以上

猶ほ，本稿は平成９年度関西大学学術助成基金（共同研究）によることを一言付記致します。

（本学教授）

注

『奇妙な戦争』の底本としては下記のものを使用した。引用文については，以下ページのみを記す。

J.-P. Sartre, *Carnets de la drôle de guerre*, nrf, Gallimard, 1995.

1) cette paix-guerre, la guerre-paix, p. 303.

2) authenticité: 本来性
   authentique, l'authentique, / Eigentlich-keit
   inauthentique, l'inauthentique, inauthenticité

3) p. 19.

4) p. 188.

5) p. 189.

6) p. 194.
7) p. 195.
8) p. 195.
9) p. 196.
10) p. 403.
11) p. 403.
12) p. 214.
13) p. 214.
14) p. 241.
15) p. 241.
16) p. 241.
17) p. 241.
18) p. 242.
19) p. 244.
20) p. 575.
21) *Journal de Gide*, le 20 décembre 1924, nrf, œuvre complète XIII, p. 484.
22) *Carnets*, p. 575.
23) p. 577.
24) p. 578.
25) p. 579.
26) p. 579.
27) p. 579.
28) p. 578.
29) p. 580.
30) pp. 610-612.
31) J.-P. Sartre, *Situation I*, Gallimard, 1978, p. 283.
32) ibid., p. 278.
33) *Carnets*, p. 253.
34) pp. 254-255.
35) Stuart Zane Charmé, *Vulgarity and Authenticity, dimentions of otherness in the world of Jean-Paul Sartre*, The University of Massachusetts Press. AMHERST, p. 6.
36) ibid., p. 7.